

Ⅲ 昭和期における盛岡市の災害

～『盛岡市史 第10分冊「昭和期下」

「第2章 公安」「第3 災害」(P68～P73)』より～

1 水害

昭和に入り、9年5月、7月、15年9月の水害があった。

(昭和9年5月の水害)

9年4月ころより気候不順となり、5月中旬は北上川はじめ諸川の氾濫となり耕地の流失があった。ふりつづいた雨に高松池の水門が腐朽してあったので、5月21日午前8時ころより決潰し、見る間に直径2間ほど大穴が開き水が溢れ出した。周囲ほゞ30町の池に満々と湛えた水が溢れ出したので上田通りは云うまでもなく田圃一面やがて大通り方面が水没になるのであり、急を聞いて馳け付けた部落民が必死となって大穴はその儘^{まま}放置して水門の内側水深約7尺(約2.1m)の池中に土俵を約700俵を沈めて奔流を遮ることを得たが、午後3時ころに至り、10坪ほどの小波止場が水門から池中に三角型に突出するの奇観を呈したが、部落民数百の死活を賭けての奮闘でようやく大事に至らなかった。予算はわずか900円にすぎなだったので、1週のちに始まる田植をひかえて部落民の焦慮一方ならず、市当局の姑息な態度が避難され、万一市が徹底的工事を施さぬ場合には、6月から開かれる県会に働きかけてもと意気込んでい

(昭和9年7月の水害)

7月には県下にわたる豪雨あり、28日には各河川刻々増水し、午後5時半に至るも減水を見ず北上川の如きは1時間約1尺(約30cm)ずつ増水する有様で、午後5時半県保安課の報告は左の如く伝えている。

市内を貫流する北上川は28日午後に至って1時間約1尺(約30cm)の率で刻々に増水し、午後5時に至って明治橋附近は約9尺(約2.7m)、夕顔瀬附近は約6尺5寸(約2.0m)の大増水を来し、木伏^{※1}裏通り開運橋北方料理店街は浸水の危機に瀕し、料理店開運亭裏土堤約2間(約3.6m)は決潰^{おそれ}の眞ありとの報に、盛岡署員消防員の非常招集を行ひ、右土堤に土俵を積んで決潰を防いだが、同所土手の無料宿泊所は遂に浸水し、軒並みの家には不安におびえて避難準備を整える有様で、一方明治橋方面との橋際の新標尺は流失し、山田農具店裏手の畑地には濁水土堤を越えて流入したが、同6時に至って逐次減水し、同9時には約5寸(約15cm)減り小康を得るに至った。明治橋際に於ける増水状況左の如し

午後4時半	2米60
同5時	2米65
同6時	2米63
同7時	2米625

豊沢川・猿ヶ石川増水，ことに胆沢の被害は甚大であった。

(昭和10年8月の水害)

10年8月また降雨うちつゞき，24日朝盛岡測候所の発表によれば，青森地方を襲うた不連続線が南下し，岩手県中部を中心ににわかには晴れ上る見込がつかない。25日朝よりの雨量は午前9時現在坪当り5斗5升（約99リットル）に達し，昨日来の総計1石4斗6升（約263リットル）を越えこのまゝでは河川の氾濫をまぬがれまいとのことであったが，北上川は幸に氾濫をまぬがれ，県工事の盛岡土木管区は36カ所2,500円市工事は7カ所28,600円にとゞまるのみであった。

(昭和15年9月の水害)

15年9月，懸念された二百十日も豆颱風の擦過傷程度でさして被害を見ず一安心のところ2日午後から降り出した梅雨型の雨はふり止まず，3日，4日とつゞき，4日夜より豪雨となり，就中県中央部の各河川の増水物凄く，中津川は増水6尺（約1.8m）以上に達し，濁流渦をまき十数年の増水ぶりで5日朝までに，岩手・紫波・稗貫三郡下の橋梁流失し，盛岡市内の家屋浸水，道路の冠水崩壊等の被害で5日正午県土木課に達した報告によれば，盛岡管内北上川明治橋5日午前8時水量3米20とある。

北上川増水のため開運橋上流木伏^{※1}附近の土堤は浸水の危険寸前にあり，5日午前警防団が奉仕作業に繰り出し，土俵をきずいてやうやく濁水を喰えとめることを得た。

仁王新町と菜園大通り方面は，赤川^{※2}が増水し，仁王新町寄合井戸附近より溢れ同町街路は河川と化し，附近一帯は氾濫して，床下浸水10戸におよび，さらに濁水は菜園方面に流失して大通り方面は濁水みなぎり膝を没する深さとなったが5日午前小晴れとなり濁水やゝ減ずるに至った。

神子田・築川方面は北上川と築川増水の狭撃で合流点附近の神子田町裏民家は床上浸水十数戸に及び，5日正午ころ流失の危険にさらされ，神子田通り築川橋附近は河川と化し，小舟で交通しておる状況で，築川橋は危険に瀕し，上流の葛西橋は遂に流失した。

県庁地下室脇歩廊は約3尺（約90cm）水溜となり，5日午前警防団のポンプが出動して掻きあげるさわぎであった。

3日にわだつた県下一帯を襲うた豪雨も5日午後より小降りとなり，3時ころより雲の切間

に青空さへのぞき、天候回復をおもわせ、北上川・雫石川・中津川も減水の一路を辿りはじめた。

北上川は水沢方面16尺(約 4.8m)、中津川6尺(約 1.8m)、雫石川10尺(約 3.0m)、築川7尺(約 2.1m)の増水で、家屋浸水は仁王小路^{※3}の大部分と三戸町^{※4}・新山小路^{※5}・菜園・帷子小路^{※6}の各一部で、床上浸水 136戸、床下 445戸、神子田床下10戸、中野地内床上24戸で、中野地内畑45町、田12町の冠水があった。

市は5日長町^{※7}・長町裏・木伏^{※1}・上田・仁王新町・神子田・山岸等の地域に係員を派し被害程度を調査し、6日午後1時より土木委員会を開催し対策を講ずることとなった。

(昭和18年10月、19年7月、28年7月の大雨)

ついで18年10月3日、4日は県下一般に暴風雨あり、盛岡の降雨量⁹⁵を^{みり}示し、19年7月19日より22日は豪雨あり、中津川増水甚しく流失家屋十数戸に及び水道破裂し断水2旬余に及び、28年7月23日豪雨あり、19日以来降りつづいた雨に各河川増水したが、甚しき被害を見るに至らなかつた。

(昭和22年夏季の水害)

22年の夏季は降雨つづき、3次にわたる水害があった。第1次は7月24日雫石川太田橋は3.40米、北上川明治橋は3.50米、第2次の8月2日には太田橋3.40米、明治橋3.80米、第3次は9月15日太田橋、3.90米、明治橋4.30米で、中津川の増水こそ少がったが、そのほかの河川は明治43年の大洪水に比すべきもので、床上浸水 2,043戸、床下浸水 659戸で全潰17戸、半潰20戸あった。

工業関係の被害は木工、金属等の工場に多く、大沢川原・杉土手^{※8}最も被害多く、第3次のみに見るも全市21工場に上っている。土木関係の被害は第1次は少がったが、第2次は北上川館坂橋、築川の沢田橋、葛西橋みな流失し道路の欠潰^{おびただ}夥しく復旧工事半ばに第3次の水害を蒙り、第2次に数倍する被害を見た。北上川の三馬橋・築川の築川橋・葛西橋、沢田橋みな流失し、用水路は中野・東仙北町・上厨川の諸処にわたり延長 3,201米に及んだ。なお水道関係の被害が多かった。農作物に対する被害は第3次は田畑の冠水尤も甚しく^{もつと}甚しく^そ蔬菜皆無の惨害を蒙ったところが少くなかつた。

土木施設の被害は道路24カ所延長 1,485米、橋梁6カ所 208米、用水路6カ所 787米、井堰2カ所 135米、堤防2カ所 562米に及んだ。

第3次水害における対策として、イ、応救炊出米、衣料、食器の無償配給、ロ、罹災者に対する見舞金、ハ、被害農家に対する見舞金、ニ、繰上配給の実施、ホ、調味料・薪炭の特配、ヘ、必需品の斡旋、ト、消毒薬剤の撒布、チ、健康診断と腸チフスの予防注射等民生委員、救護団体の活動と県及び政府に対する陳情、地租の減免措置等あらゆる対策を推進した。

2 火災

消防設備の充実、家屋の改善等諸種の事情により、広区域にわたる大火災をまぬがれたことは幸である。使用火の不始末、煙突の被害が絶えないが、電気、化学製品の引火が増加する傾向にある。

年次	火災戸数		損害価格 (円)
	全焼	半焼	
元	3	—	10,635
2	5	—	40,992
3	8	1	4,504
4	8	6	71,703
5	71	10	84,313
6	26	7	54,312
7	32	—	58,167
8	—	29	43,824
9	15	8	14,335
10	45	10	237,744
11	23	20	35,067
12	53	9	55,693
13	12	3	18,472
23	火災度数	20	76,880,500
24		45	9,032,902
25	世帯数	23	22,704,008
26		48	38,692,174
27		26	25,643,262
28		82	27,175,162
29		34	85,756,729

< 本文中の地名等について >

- ※1 木伏 現在の盛岡駅前北通。北上川右岸の夕顔瀬橋から旭橋にかけての地域
- ※2 赤川 かつて、現在の仁王小学校付近、盛岡中央郵便局西側など市内中心部を流れていた堰
- ※3 仁王小路 現在の大通三丁目から中央通二丁目・三丁目、本町通二丁目・三丁目にかけての地域
- ※4 三戸町 現在の本町通三丁目、中央通二・三丁目地内。盛岡税務署から中央通付近にかけての地域
- ※5 新山小路 現在の中央通三丁目地内
- ※6 帷子小路 現在の中央通三丁目地内
- ※7 長町 現在の長田町方面

※8 杉土手 現在の清水町，南大通三丁目地内。北上川左岸沿いの地域